H20.10.18.(土)

（第三種郵便物認可）

いじめの根底に何が？

日本子ども学会が学術集会

日本子ども学会学術集会のシンポジウム（奈良市の奈良女子大）

強い閉塞感 異質を排除

いじめの根底には何が潜み、どう解決したらいいのか。日本子ども学会が、いじめをテーマにした学術集会を二日間にわたって奈良市で開催。コミュニケーションの問題が深くかかわっていることが浮き彫りになった。

基調講演で、鷲田清一大阪大学長は「いじめは子ども社会で目立つが、子どもだけの問題ではない。自分たちと違う存在を排除し、連帯を強化する」と大人社会も含めた広がりを指摘。「自分を肯定できない近代社会の煮詰まった風景が、大人にも子どもにも浸透している。自分が大事にされていることを、体のどこかで感じることが大切だ」と訴えた。

初日のシンポジウムで、奈良県安堵町立安堵小の丸山まり子教諭は指導経験を基に「いじめの標的になりやすいのは、コミュニケーションが苦手な子」と発言した。「自分と考えの違う人間の意見を聞くと面白い、という視点が増えると、子どもの力関係は様相を変える。学校を、子どもが肩の荷を下ろす空間にできないか」

学校に囲い込まれて

内藤朝雄明治大准教授は

初期の対応が鍵

初期の対応が鍵

「殴られたりよりも、コミュニケーションの細かいねじれが痛みになる。子どもの生活すべてが学校に囲い込まれ、きずなも学校に囲い込まれている」と現状を分析した。その上で、子ども一人一人が試行錯誤しながら、自分に合ったきずなを手に入れられるよう支援するべきだと提案した。

異年齢の集団に期待

二日目のシンポでは、伊東毅武蔵野美術大教授が「クラスの枠を外せば、無視などのいじめは激減する。クラスの閉塞性を弱めるには、どうすればいいだろうか」と問題提起した。浜田寿美男奈良女子大教授は、「同年齢輪切り集団」から「異年齢の集団」に組み替える方向性を示した。

深刻化するインターネット上のいじめについては、土井隆義筑波大教授が「匿名性を保ちやすいので、心理的な抵抗が弱まる一方、同時に盛り上がる感覚が生まれ、集合的な沸騰状態をつくり出すのに都合がいい」と説明。携帯電話などで「強迫的につながり合わなくてはならないしんどさがある」と、いじめの背景の変容に触れた。

次男の清輝君がいじめにより十三歳で自殺、愛知県西尾市のいじめ相談員を務める大河内祥晴さんは、特別講演で「いじめを受けた方がどんな思いをするか、伝える方法はいくらでもあると学校に言いたい。一人の人間として子どもに話し掛けて、と先生にお願いしている」と述べ、教員の積極的な関与の必要性を強調した。

「いじめで大事なのは、初期の段階でどう対応するかだ。そうでないと、どんどんエスカレートする」。大河内さんは早急な対応を関係者に求めた。